

Press Release

CCA市民美術大学 特別講座 現代美術センターCCA北九州の活動について

2021年6月12日 土曜日 午後2時

北九州芸術劇場 小劇場

(〒803-0812 北九州市小倉北区室町1丁目1-11 リバーウォーク北九州内)

参加費1000円 要申込 申込締切6月7日(月) 定員80名

現代美術センターCCA北九州は、1997年の開設以来今年で25年目を迎えます。設立当初にCCAが目指したのは、既存の美術館や文化施設とは違う、研究や交流の「場」となるような新しい形の施設でした。

アートや文化は、いつの時代も社会に密接に関連し、新しい考え方が、様々な背景や要素から生み出されていきます。現代アートの動向をとらえるには、ホワイトキューブによって生み出される隔たりや壁、またアカデミックによって作られる決められたストーリーや理論を超えていく必要があります。というのも、マルセル・デュシャンやアンディ・ウォーホールなどを例にとってみてもわかるように、歴史を振り返っても、新しいアートやその概念は、常に伝統的な考え方や分類にあてはまらないところで生み出されているからです。多様な文化的、社会的見地から、アートを中心に、他分野からの意見や考え方を出し合い、交流できるオープンな場を、当時はまだアジアでも少なかった「アートセンター」という形をとって1997年にCCAはスタートしました。

20年以上に渡り、国際的に活躍するアーティストを中心に、キュレーターや建築家、デザイナー、サウンドアーティストや作家、映画監督、科学者などが、CCAに滞在し、プロジェクトを行ってきました。時には場所を東京や海外に移し、展覧会やシンポジウム「Bridge the Gap?」などを開催しました。ジェノヴァのヴィラ・クローチェ現代美術館、南洋理工大学現代美術センター(シンガポール)、アルノス47財団(メキシコ)、ミュージアム・イン・プログレス(ウィーンのアートプログラム)、フェデリコ・ガルシア＝ロルカ財団(スペイン)、ニューヨークの建築専門の美術館ストアフロント、ベヴィラクアラマーサ財団(ベネチア)、上海の中国上海国際芸術節中心、ミラノ工科大学建築学部とデザイン誌Domus編集部など、世界各地の文化財団や大学、美術館とともに展覧会、シンポジウム、レクチャーシリーズを行うなど、数多くのプロジェクトを通し海外とのネットワークを築き、国内外の美術関係者を始めとする専門家たちと話し合っていくことで、今日本を含む「世界」では何が起きているのか、それに対して現代アートを核とするCCAの活動では、何をしていくべきなのかという課題に、実践することで取り組んできました。

世界に目を移してみても、CCAのような美術館やアートセンターはそう多くはなく、また文化関連の公的な機関や活動は、その地域の経済や政治状況の変化による影響を受けやすいということもあり、長年続けるのは極めて稀です。そのような状況の中、20年以上に渡り存続してきたCCAは、世界の美術関係者の間でも広く知られるようになりました。

CCA市民美術大学では、これまで美術関係者やアートを取り巻く様々な分野の第一線で活躍する方を講師に迎え、今美術界で何が起きているのかについて考えてきました。今回は、CCAのディレクター中村信夫が、どのように海外とのネットワークを築き、様々なアーティストやキュレーター、専門家とプロジェクトをすすめていったのか、そして美術界がどう変化し、その変化に対してどのように向き合っていたのか、CCAのこれまでの活動について話します。

中村 信夫(現代美術センターCCA 北九州 ディレクター) - 80年代よりダニエル・ビュレン、マリナ・アブラモヴィッチら国際的に活躍するアーティストを次々と日本に招聘し展覧会を企画、またシドニー・ビエンナーレなど海外のプロジェクトにも参加。外務省の外郭団体である国際交流基金の事業や川崎市民ミュージアム準備室にて開館に携わった後、1997年に現代美術センターCCA北九州を設立、ディレクターに就任。アーティストやキュレーターと数々のプロジェクトを展開し、2001年には日本初の国際展、横浜トリエンナーレ(主催:国際交流基金 横浜市 NHK 朝日新聞社 横浜トリエンナーレ組織委員会/後援:外務省 文化庁 神奈川新聞社)のアーティスティック・ディレクターを務める。アジア・アート・カウンシル日本財団理事。



お問い合わせ/お申込

現代美術センターCCA北九州

〒808-0135 北九州市若松区ひびきの2-5 学術研究都市

TEL 093 695 3691 Eメール mail@cca-kitakyushu.org www.cca-kitakyushu.org